

附属中学校の取り組み

附属中学校 國川 聖子

平成 28 年度の本校の「オリンピック教育」は、これまでを踏襲しながらも、保健体育科を中心とした内容に限らない、多様な場で展開することができた。本校の教育課程は、「教科領域」と「活動領域」の 2 領域で構成されており、前者を「教科学習」と「総合的な学習の時間」、後者を「HR 活動」と「実践的活動」と区分し、全ての教育活動を行っている。

以下、それぞれの領域における活動を紹介する。

1. 教科学習

(1) 英語科

教科書「NEW CROWN 1」(pp.87-93)Lesson7「Sports for Everyone」において、助動詞 can を理解し使う学習の題材として、「Wheelchair Basketball」と「Goalball」が取り上げられている。質問をしたり相槌をうったりして会話を続ける中で、いろいろなスポーツに関心を高めたり、スポーツ紹介の説明文を読んで、そのスポーツの動きや使用する用具の特徴を読み取ったりする。その中で、なぜタイトル Sports for Everyone がつけられたのかを考え、表現する問いがたてられており、他者理解やスポーツの持つ力に触れる場となっている。この教科書には、他に、剣道、バスケットボール、バレーボール、テニス、野球、サッカー、クリケットなどが登場している。

(2) 数学科

教科書「新しい数学 2」(pp.8-10)1 章「式の計算」、いくつかの文字をふくむ式の計算や文字を用いた式を使って数の性質を説明することについて考えていく節における題材で、体育祭実行委員の生徒が、運動場にトラック競技のレーンをつくるにあたり、スタート・ゴールラインの位置や距離を導き出すために考えを深めていく内容になっている。運動・スポーツを「する」だけではない、環境をつくるための数学的な視点を学ぶ場となっている。

(3) 保健体育科

- ①「保健」と「体育理論」において、「オリンピック単元」と題して以下の内容を行った。
 - ・オリンピック(古代・近代)シンボル・近代オリンピックの課題や問題点・パラリンピック
 - ・ブラインドサッカー体験・パラリンピック競技の用具・パフォーマンスを支える科学
 - ・薬物乱用・アンチドーピングとフェアプレイ・スポーツの価値
- ②第 12 回 筑波大学附属小・中・高等学校 体育・保健体育科合同研究会において、「フェアプレイ精神を育む体育授業」として実践報告・研究協議を行った。
授業内容：具体的な事例から「フェアプレイとは何か」を理解する。
例) 運動会での選手宣誓、オリンピック・パラリンピック、ユネスコの国際フェアプレイ賞など
- ③運動会での競技種目でもある、仲間と息をあわせて動き方を工夫する「ムカデ競争(6～7名)」。JICA(国際協力機構)課題別研修「学校体育」研修員の先生方の来校にちなみ共に体験し交流を深めた。



実践報告 ▶

2. 総合的な学習の時間《対象者：各学年コース選択者 20～30名》

(1) 2年生 理科的な視点

〈コースのねらい〉 観察力や考える力（科学的な思考力）を養い、課題意識や問題意識の持ち方を学び身につけること。さらには、家庭科や保健体育科、家庭生活や社会、歴史、文化など、理科と関連する多様な事象を学ぶ。広い視野をもち、日々の知識や授業での学習の総合科を図ること。

〈一部内容〉 禁止薬物・ドーピングにかかわる新聞記事を取りあげ、科学的な視点での考察を行った。

(2) 2年生 保健体育科的な視点

〈コースのねらい〉 日本の体育・スポーツやその文化を調べ、世界へ発信する。さらには、外国人留学生の方々との交流会でその成果を発表し、異文化圏の方々の考えを知る。

〈一部内容〉 留学生との交流会を開催：英語での挨拶や互いの自己紹介、アイスブレイク、研究成果の発表、留学生からの感想や質問を伺うなど。

(3) 3年生 保健体育科的な視点

〈一部内容〉 オリンピックを測るものさしを考える：メダルの数、記録、得点、参加選手数…オリンピックが語られる時、その価値や規模を評価する指標は様々である。勝敗や記録にとどまらないオリンピックの意味を考えながら、その指標を多様に柔軟にとらえていく。中学生にとっての「オリンピック観」が語られた。

3.HR 活動

2年生では、学年目標「志と絆を大切にしよう」の一部である「他者理解、多文化理解、異文化理解」「視野を広げる」「自分たちで課題を見つける」にちなんで、ホームルームの時間に様々な取り組みが行われた。

〈一部内容〉 調べ学習（身近な社会・環境・バリアフリー・ユニバーサルデザインなど）、「ボッチャ」体験、高齢者擬似体験、義足のパラリンピアンへの講演・意見交換会、スポーツ交流会の実施（パラリンピック種目を含む）



4. おわりに

今回の報告では、中学校での学びの中核をなす「教科学習」において、各教科のねらいを達成するための題材の中に、オリンピック教育と捉えられる内容を確認することができた。また、上記の他に保護者主催の講演会において「オリンピック教育の動向」「本校でのオリンピック教育事例」を紹介する場を設けることができたことは大きな成果である。保護者への理解の輪を広げることができたことで、生徒たちの学びの可能性がより広がっていくことを期待したい。

来年度も、これまで同様に「中学校」として各教科の特徴を活かした実践を把握するとともに、様々な場面での実践の可能性を探っていきたい。また、平昌オリンピックが開催される来年度こそ、大会の「事前」「開催期間中」「事後」といったそれぞれの「時」を活かした学びのあり方を探る好機としていきたい。